
マイ・フェア・レディ

津軽 あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイ・フェア・レディ

【Nコード】

N5967P

【作者名】

津軽 あまに

【あらすじ】

国とともに失われた母親の命を助けるため、亡国の姫は、肖像画に描かれた相手と時間を超えて対話することのできるという魔術を行使する。壮大でも勇壮でもない、ファンタジー短編。

目の前には、澄み切った湖。その水面が、覗き込むわたしの姿を映し出す。

一つ深呼吸をすると、わたしは王都の闇商人からくすねてきた呪符を手にとった。

込められているのは、時を越え、肖像画に描かれた人物と対話する術。

目の前に置かれた木枠には、一人の女性の絵がはめ込まれている。このために腕利きの画家を探し出して描かせた、母の絵だった。

彼はわたしの顔と証言から、ほとんど完璧に生前の母を再現してのけた。

気品と意志、そして憂いを帯びた美しい貴婦人。

泥まみれの簡素な革鎧という、冒険者姿のわたしとは大違いだ。

今は亡き母の姿。出そうになる涙を飲み込む。

この魔法が成功すれば歴史は変わる。

そうすれば、母はその微笑みを、今もわたしに向けてくれるはずなのだ。

呪文を詠唱する。激しく燃え上がる符。

その炎は目の前の湖面へと広がり、六芒星を描き出した。

次の瞬間。湖面に映っていたわたしの姿に入れ替わるように、一人の貴婦人の姿が映し出された。

その容姿は、肖像画と瓜二つ。

「母様っ！」

わたしは思わず声をあげた。

「あなたは……」

その貴婦人は、大きく目を見開いた。

無理もない。母のいる世界では、わたしはまだ幼い子供なのだから。⁵

「わたしよ。少し大きくなっただけで、わかるでしょう、母様？」

胸が詰まる。母の姿がある。

肖像画のそれではなく、動き、こちらの呼びかけに応える、生きた姿がある。

「そんな、まさか……」

疑いを解こうと理由を説明しようとして。突然の疲労感に言葉が詰まった。

なるほど、時を越える禁呪とは名だけではないらしい。一呼吸ごとに精神が削られていく。

感慨に浸る時間くらいは欲しかったけれど、仕方がない。

これからのことがうまくいけば、こんな術など使わずとも母とはいくらでも話せるのだから。

「詳しいことは時間がないから。母様、よく聞いて」

この日のために考えてきた言葉を紡ぎだす。

建国記念五十年祭に宰相が謀反を起こすこと。隣国の軍の侵攻がそれに呼応すること。

それを止めるか、そうでなければ城から一刻も早く逃げ出すべきであること。

そうでないと、あなたは死んでしまうのだから。

湖面の向こう側の母は、じつとわたしの話に聞き入っていた。その表情は、固い。

突然の話だ。無理もない。

まだ、かろうじて魔法を維持する気力は続きそうだった。

心なしに青ざめている母親に、わたしは、敢えて微笑んで見せた。

「ところで」

そして、

「今はこんなだけれど。わたしも、母様みたいなレディになれるかな？」

わざと、とりとめもない問いを投げかける。

わたしの意図を察してか、母もゆつくりと微笑み返してきた。

「……もちろんよ。『マイフェアレディ私のかわいいお嬢さん』」

そうだ。わたしが取り戻したかったのは、この、微笑だったのだ。

母が生前着ていたドレスを身にまとい、鏡台の前で自分の姿を眺めてみる。

母の使っていた部屋。母の使っていた服。母の使っていた鏡台。

あの魔法を使ってから、五年。

歴史は、変わらなかった。

変わったのかもしれないが、少なくとも私は母には出会えなかった。

宰相に奪われた国と城を取り返し、領土中を探しても。

姫という肩書きなど、取り戻しても意味のないもの。
そんな称号に比べれば、湖面での母の最後の言葉の方が、何倍も私の支えになった。

鏡台の脇に置かれた肖像画に目をやる。

今の私と同じ服を着た、母の肖像。

とある魔法の触媒にと、私が描かせた絵。

絵の中の母はおそらく、今の私と同じくらいの年齢だろう。私の肖像画で通用しそうだ。

「……母様」

呟いた、その時。鏡台がまばゆい輝きに包まれた。
そして、私の姿が映っているはずの鏡面には……

「母様っ！」

「あなたは……」

泥まみれの簡素な革鎧。典型的な冒険者姿。

肖像画の女性をそのまま幼くしたような。それは確かに、「五年前のわたし」だった。

彼女はいたずらっぽい笑みを浮かべて私の顔を覗き込む。

「わたしよ、少し成長してるけど、わかるでしょう、母様？」

全てが一つにつながった。

時空を越えた肖像画の主との会話。私とそっくりな母親の肖像画。何故、歴史が変わらなかったのか。

「そんな、まさか……」

私の困惑をよそに「わたし」は一気にまくしたてる。

「母」を救うための。過去を変えるための助言を。

この少女へ、何を言うべきだろうか。

一度きりのチャンスをふいにしてしまったことを、彼女に伝えるべきだろうか。

私の表情を、告げられた真実への恐怖からのものと勘違いしたのだろうか。

鏡の向こうの私は、声を和らげ、言った。

「ところで……」

私は知っている。この後、「わたし」が口にする問いかけを。

「今はこんなだけれど。わたしも、母さんみたいなレディになれるかな？」

それに対する私の答えがどれだけ、彼女が祖国を取り戻す戦いの支えになるかを。

だから、私はこう言っただ。

「もちろんよ」

私が、そして「わたし」がずっと取り戻したかった、あの微笑みを浮かべながら。

『マイフェアレディ 懸命だったいつかの私』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5967p/>

マイ・フェア・レディ

2010年12月31日07時06分発行